Navigation

Previous 月
Next 月
Today
Archives
Admin Area

Categories

All
General

灰皿町の本

●幻想小説『なめくじキーホルダー』 清水麟造

●「週刊読書人」詩時評 一九九二-一九九三年 清水麟造批評集 第一分冊

Search

検索キーワード

検索

Suigara-yama_OoazaHyo(Kyoko_Umino)

2006-07-25

笑う虫

「エミール・ガレとドーム兄弟」展に出かけた（七月八日—八月二七日 Bunkamura ザ・ミュージアム）。静かな館内に、ガラスの花器たちが照らされ、展示されている。トケイソウ、サンザシ、菊、ダチュラ、蘭、ベコニア、ニオイアラセイトウ、アジサイ、藤、マグノリアほか。モチーフには花が多い。平たくなった花たち。その移し替えにより、花器そのものがべつの花の時間を生きているとおもった。べつの時間にふっといざなわれる感覚。「笑いは、事物を日常生活の文脈から切り離して、宇宙的リズムに置き換える最も身近で有効な手段である」（『道化的世界』山口昌男）を思い出す。このガラスの花たちは、では笑いなのか。花のなかではアイリス（エミール・ガレ《アイリス文花器》一九〇三年頃）がとくに印象的だった。全体が紫がかった円形のガラスにひときわ濃い紫のアイリスが咲き誇っている。というよりも、いくぶん毒を含んだ手招きとして花をひらいている。菊や藤は日本的なものとして受け止められていたらしい。ドーム兄弟の《白樺文ランプ》（一九〇〇年頃）や《コウモリ文ランプ》（一九〇五—一〇年）もあったが、白樺やコウモリも当時は日本的なものと。異国というべつの時間をこめていたのだろう。

この手のガラス作品にはムシや爬虫類も多い。トンボ、蛾、ヘビ、カゲロウ。この展覧会にはなかったが、セミ、ワニ、サンショウウオなどもある。かつてはじめてみたとき、あまり日常では興味をひかなかったムシたちが、こんなにも燦然とひかりを内包していることに、新鮮な、神妙な違和を感じたものだった。「笑いの効果のうちで最も目につきやすいのは、事物・言語と日常生活的文脈の間に剥離状態を起させ、それらの事物・言語を「見なれぬもの」に転化させるという働きである」（前掲書）。そう、あらたに見なれないものたちのしだす合図。《ヒキガエルにトンボ文花器「好かれようと気にかける」》（エミール・ガレ、一八八八年）。円形の壺の上方にトンボがいて、右下からほぼ右上にかけて浮き出したヒキガエルがながめているようだ。解説によると、トンボは善、ヒキガエルは悪のアレゴリーがあるという。飛ぶものと地にあるもの、なのか。あるいは姿のせいなのか。それはともかく、沼のような茶色と緑のガラスの背景とともに、善悪を透して、超えた

「見なれぬ」異界が美として立ち現れてくるのだった。
　たとえば冬木立、湖畔。以前からドーム兄弟の、特にちいさなグラスや花器につくられた景色が好きだった。今回も《冬景色文小花器》（一九〇〇―〇七年）、《海景文卵型小花器》（一九一〇年）など何点か出品されていた。手のひらに乗るちいさな世界。それは夢をかためた景色のようでもあり、覗き箱のなかで息づく世界が現実世界と通ずることからくるめまいのようでもあった。出入り口。「道化的行為の根底にある志向は、絶えず、日常世界の中において可塑性の高い、言語及び肉体表現を、想像力を媒介にして、異質の次元に置き換えて、宇宙的リズムをこの世界に導入するきっかけをつくることにある。（…）詩的言語が道化の身振りと切り離すことの出来ない所以である」（同掲書）
　ガレについては、どちらかというとランプ作品が好きなのだが、この展覧では、花器が中心で、ランプはほとんど出品されていなかったので、そこにわずかな不満ものこった。内からひかる灯りたちの、あの息づく感触、あるいは日常と美の接点。ガレの生没は一八四六―一九〇四年。ガレ没後、後継はあったが一九三一年に工場は消滅する。世紀末をぎりぎりまでひきずり、消えていったガレという灯をもランプは反映しているのかもしれなかった。

（「エルミタージュ美術館秘蔵　エミール・ガレとドーム兄弟」展
http://www.bunkamura.co.jp）
00:02:00 - **umikyon** - **No comments**

2006-07-15

あおい空、あおい花

　池袋のサンシャインシティに、プラネタリウム番組の『銀河鉄道の夜』を観にゆく。映像・脚本はＫＡＧＡＹＡ氏。「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月明かりからもらってきたのです…」（宮沢賢治／短編集「注文の多い料理店」序文）のことばがドームに映し出される。こんな風に、賢治のまわりに実際にあった岩手軽便鉄道とイギリス海岸が、銀河鉄道、天の川のもとになっていたのではなかったか、と作者はいう。だからその映像は、それらがまじった、空と地がむすびつく水平線のような印象をも受ける。
　作者のうけとったイメージと、賢治の描いた接点。作者は「銀河鉄道が走っている野原が星空そのもの」なので、空には星がいっさい描いていない、という。また、星座を形作る大きな星がみえるとしたら、それは賢治の物語のなかの「三角標」なのだった。ススキの野原をはしってゆく。澄んだ水がたゆたっている。そしていちめんに咲くリンドウ。だれものっていない汽車の席が映し出され、ジョバンニやカンパネルラの声が…いや、じつはナレーションが「ぼく、飛び下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせようか。」「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしまったんだから。」と聞こえてくる。窓のそとではほんとうに、リンドウが過ぎてゆくのだった。カンパネルラを想起させる、花のカンパネラ、カンパニュラは、りんどうの仲間ではなかったかしら…と、あおい空ののはらに咲いているあおい花をみて思う。家にかえってしらべると、じっさいはホタルブクロの学名が

Login
ログインID:
パスワード:
このPCを他の人と共用する
ログイン
Powered by
nucleus

「Campanula punctata Lam. var. punctata」で、カンパネルラの元となった花ではないか、とある。そしてカンパネラは、ラテン語で「ちいさな鐘」のことだと。けれども、とわたしはまだ、映像をみた折の印象を擁護したくなる。ちいさな鐘ならば、それもふくんでいるかもしれない、と。ひととき鳴ったちいさな花、そして二重写しになったカンパネルラ。ひびきながら、空のかなたにさってゆくちいさなあお…。すべてが二重映しになって。

汽車もまた、北十字から白鳥座（白鳥の停車場）、蠍座（蠍の火）をとおり、南十字星（サウザンクロス停車場）へ走って行く。じっさいの空と、賢治のものがたりがシンクロしていたのだと、映像はまざまざと教えてくれる（ほんとうは日本では北十字と南十字は同時には見えないらしい。ここに創作のもつ力を感じた。見えないけれどあるものをここではゆたかにあらわすことができるのだ）。

このかさなりに、無人の汽車からナレーションをとおしてふたりの声が、あるいはサソリの話しをする女の子の声がするのに好感がもてた。わたしたちはそこに各自のジョバンニやカンパネルラを乗せていいのだから。

汽車の映像から離れ、プラネタリウムらしく、満天の星、そして天の川に夏の大三角やアンタレス、空にひかれた白い線で、星座の説明がなされてゆく。たとえば小学生の折にみたものをよぎらせ、これはこれでなつかしかったが、小さな違和もかんじた。ふいに賢治の世界からひきはがされたような。そして、四〇分と限られた上映時間を思い出し、不安にもなった。どこまで会話がなされ、どこまで汽車はゆくのだろうか、と。

そう、プラネタリウム的な説明をいれなければならないこと、四〇分という時間の枠、これらの制約のなかで、賢治の世界を折り込むことはむつかしいことだ。けれども、それを考慮しつつも、すこしの違和についてふれてみたい。汽車はなにか宙ぶらりんなままさっていってしまったようだったから。

パンフレットなどには『銀河鉄道の夜』を忠実に再現したとあるが、それはちがうと思った。再現ということば自体にすこしひっかかるが（クンデラのいったとおり、ある作品に対しては変奏することしかできない。作品とは再現することのできない一回性だと思うから）、それはさておき、なにかがたりないのだ。映像的な面をうつくしく変奏しているとは思うが、物語的な世界はかいつまんだあらすじとまでもいかず、導入にとどまってしまっている、ということかもしれない。だから、あの悲しみをふくんだうつくしさ、なにかいいあらわすことのむつかしい夜への畏怖のようなものを、わたしたちは感じる手前、入り口でおいてけぼりにされてしまうような気もするのだった。

こう書いているわたしも、賢治の『銀河鉄道の夜』をよみかえしても、その繊細なゆたかさ、カンパネルラとジョバンニの繊細な関係（そこにはふたりのおかれた立場のちがいが、生と死をふくめて入れ子細工になっている）、天の川と川、夢と目覚めは、ガラスの糸で複雑におりあげられたタペストリーのようで、ほぐそうとしても、それは迷路のように、逃げ水のように逃げてしまい、謎ばかりでつつんでしまう、そんなイメージでしか語れないのだが。

また汽車がわたるシーンにオリジナルの挿入歌が流れていたこともひっかかった。歌詞はいらないとおもった。音と映像だけで重なった夜を表現することのほうがよかったのではないか。歌詞は賢治のそれともまったく関係のないことばたちだったので、夜とわたしたちのあいだに扉がとざされたような気がするのだった。あるいはわたしたちの夜と、眼前の夜のあいだにさしこまれたガラス板。

けれども、映像にはこころひかれることができた。思っていたよりもずっと。もえあがるサソリの火、しろくもえたつ十字のかたち、リンドウ…。そしてなぜか。ホタルブクロはもう花もおわってしまったからか、ともかくプラネタリウムを観て後、朝顔の鉢植えがむしょうにほしくなった。小さな鐘というよりもトランペットだろうに。行灯づくりのものを買う。今朝も咲いてくれた。濃いももいろ、しろ、そらいろの三色だと、三日かけて知った。キキョウ、ツリガネニンジン、ソバナはまだだろうか。こちらは休みにでも、近くの植物園にみにゆこう。そんなふうに、わたしも「もらってきた」いのかもしれない。プラネタリウムはそんんなことをつたえてくれたのだった。あおい空とあおい花。

（六月十七日〜九月十日、サンシャインスターライトドーム満天　http://manten/konicaminolta.jp）

00:16:01 - **umikyon** - **No comments**

2006-07-05

白い蛹の海

今朝もまた地下鉄の出入り口で蝶をみた。黒い蝶がたおれていた。たぶん今までもこんな光景はあったのだ。わたしが気づかなかっただけなのだ。彼らはどんな喩をもっているのだろう。どんなイメージを。

「人間の意識領域は自我によって統合され、言語によってその内容を把握することができる。（…）自我によって把握することが難しいものほど言語化することが難しくなってくる」。ここからすぐ無意識の領域に流れ込むのではなく、「その中間領域あたりの動きは、イメージとして把握される」という。この自我の統制力が弱まるとき、無意識的な動きが活発となる。「それを自我によってイメージとして把握したものが夢であると考えられる」。また夢ではなく、外界の知覚にもイメージがあらわれることがある。「他人に秘した悪事をもっていると、他人が話し合っているのを見るとすぐ自分のことを言っているのではないかと感じたりする。これは、無意識的な恐れの感情が、そのようなイメージを提供するため、外界の知覚を歪曲させるのである。あるいは、未開人のように自我が弱い場合、外界の知覚と内界のイメージは融合が生じやすく」、たとえば朝日を見ると神だと思うのは、「外界にある朝日と内界にある神のイメージが完全に融合し」ているからだという。

引用が長くなったが、「 」内はすべて『影の現象学』（河合隼雄、講談社学術文庫）。

このイメージは、とても詩的だと感じた。外界と内界はそうした意味でつながっている。内側に向かうことが外側に向かうことである、ということ。もちろん、こうしたイメージには負のものも混じっていることも忘れてはならないが。

また同書によると、エリアーデは、「イメージはその構造上『多価的』なのである。もし精神がイメージを用いて事象の究極の実在を把握するとすれば、それはまさしくその実在が矛盾した仕方で顕現するからであり、したがって諸々の概念によっては表現され得ないからである」と述べている。まさしく詩の言葉のはなし、ではなかったか。

混んだ電車のなかで足を踏まれる。「（謝ってもらわないと）痛みはずっと残るものよ」と母だったかが小さい私にいったことがあると思い出す。この痛みもイメージなのだ。

「概して夢に出てくる同性の友人は、自分が生きなかった反面、影や無意識のあらわれである」と、前回わたしは書いたが、これもじつは『影の現象学』による知識だ。日曜の夜、夢の中で、小学校だったかの同級生と町で再会していた。彼女は子供がいて、孫もいるという。わたしの年齢で孫がいるのは早すぎるような気がしたけれども、そういうこともあるのだろう、とうなずいている（夢のなかでも変に思っている、いや、夢だから過剰なたとえになっている、とさえ思っていたような気がする）。これも生きなかった反面、無意識からイメージをとおしてやってきた影の部分のわたしなのだ。

昨日の夕方、コウモリが飛んでいるのもまた見た。夕空にせわしなくうかぶその姿は、鳥の影のようだった。世界はイメージであふれているのだ、これは喩であふれている、ということではなかったか。

もう何年も、友人としゃべったり、どこかに遊びにいったり、が出てくる夢をみることが多かった。その夢は起きたわたしにとって、ありふれた日常だった。だからよみとるものはなにもないと内容をずっと忘れてしまう、捨ててしまっていた。だが友人と屈託なくしゃべるわたしは喩だった。それはそうできないわたしの影だった。

ところで、わたしはつい『影の現象学』ではなく、『影の魔術師』と本のタイト

ルを読み違えてしまう。こちらはたしかロード・ダンセイニの本にあったタイトルだ。わたしにとっては現象学よりも魔術的なものとして、影たちはイメージされるからだろう。

…この一週間ばかり風邪をひいている。だるく、とても眠い。浅い夢と現実のあいだをいったりきたりしている、のだろう。そのせいか、イメージからうちあげられた言葉の破片を、あるいは映像の破片をよく拾ってくる。「正体の結果、錆びました」「ビルの影に船影が重なる」「時代のない世界」。時代のない世界というのは、ある意味自由な世界だった。わたしたちはそこで各々好きな時代をイメージする。そうすることでその時代に参加できるのだった。それは行間のような世界だった。そして「小さな舟に乗っていたが、じつは片方の切れた吊橋に乗って宙ぶらりんになっていた。はげしく」。それは海にいても空にいても宙ぶらりんなのは同じなのだ、ということかもしれない。そうではないかもしれない。

だが、じつはこの破片たちを組み立てる気力が残念ながらない。風邪のひきはじめにはそれでも机にむかっていたのだが、つづく微熱は気力をどんどん削いでゆく。組み立てないうち、ことばや映像はまたもとの海にかえっていってしまう。ひきざんとたしざん。世界はイメージであふれている。だが気付かなければ、構築しなければ、それは…。

紫陽花の季節がもうすぐおわる。日曜日、枯れかかった花をもつ茎に、蜘蛛の巣がかかっているのを見た。巣にかかり、もがく蝶を、さらに逃げられなくするために、蜘蛛が吐きだした糸でぐるぐる巻いている。蝶はまったくうごかなくなった。糸で巻かれた姿は、なんだか白い蛹のようにみえた。死のほうへ孵化していったのだ。

00:02:00 - **umikyon** - **No comments**